

一家が日本に來ました。次男一家がまだ中國に残っています、これもなるべく早く呼び寄せたいと念願しています。

私の人生は時代の流れにしたがって、思いも掛けない波瀾万丈となりましたが、滿州・中國時代の、人も言えない苦難も今は過去のこととなり、孫十人に囲まれて平和な、幸福な、何の不自由のない暮らしをしています。しかし、異郷の地で、日本に帰ることを最大の希望としながら亡くなった人々のことを思うと、胸がいっぱいになります。

私にとっての戦前・戦後

神奈川県 大屋 博美

一 私の生い立ち

私は、平成九年の六月四日をもって八十二歳となりました。父勝喜（明治十九年生）、母ウタ（明治二十七年生）の長男として門司市に生まれました。

父は、四男であったが、長男としての役を引き受けていたようだ。それは長男、次男、三男が、すべて次々と早死をしたからに違いないと思っている。父は常々「兄弟は、多い方が楽しいものだ」と言っていた。そのせいかどうかは知らないが、私の後に五人の子供をつくった。母が病気で早死にをした後に後妻を娶ったが、その継母との間にも、五人の子供をつくった。戦後の日本では珍しいかもしれないが、明治・大正のころには、どこの家庭でも子だくさんが普通であり、あまり珍しいことではなかった。

父は、北海道帝国大学の林学科を卒業して福岡県に帰り、県内の郡役場に勤務したり、農学校の先生をしたりしていた。そのうちに、先輩の薦めもあって、東洋拓殖という当時の国策会社に入社した。その後は、平凡なサラリーマンとして、内地（日本）と朝鮮との間を行ったり来たりしていた。私は、後に大学を卒業して、滿州拓植公社に職を得たから、父と同じような人生経路をたどったといつてよからう。

その生活の軌跡をたどると、北緯三十二度から五十

度までの間、そして、東経でいうと百二十五度から百四十二度の間を、一カ所平均三年ほどの生活サイクルで、その居住場所二十五カ所を数える遍歴の人生であった。私の手元にある古びた「WORLD ATLAS RANDOMALLY - STANDARD (世界地図帳)」の該当のページには、赤ペンで、人生経路の軌跡が無数に書き込まれている。よくもまあ、こんなに歩いたものだと、今更ながら思い出している。一万五千キロメートル以上はあるだろう。

そんなことで、小学校も東京の東中野から北朝鮮の沙里院へ、そして京城へと三度変わっている。しかし、中学から大学を卒業するまでは、京城で過ごしたので、私にとっては、京城は第二の故郷とも呼びうるような、懐かしい所である。

二 第二の故郷、京城時代の思い出

小学校を卒業すると、生まれて初めて入学試験なるものを受験し、幸いに合格した。校名を京城公立中学校といった。昭和三年四月のことであった。試験の初日、算数の成績が至って悪く、自信を喪失してしまっ

た。それでも幸いに、翌日の試験で挽回して、どうかパスできたのだ。後日、先生にお願いして調べてもらったところ、合格者二百人のうち、百八十二、三番だったとのことであった。小学校では成績優秀と認められていたので、私も父母も、びくりにしてしまっただ。これではいかんと一念発起して、一年の一学期末には八十番ぐらいに、二、三年のころには四十番ぐらい、そして卒業のころには何とか二十番内に入った。

こう書くと、いかにもスイスイと友人たちを追い抜いていったかのようなようであるが、そうではない。これには自分の努力もあったが、母がティーチング・マシンのように援助してくれた結果にはかならない。私の家は、特別に貧乏というほどではなかったが、金持ちではなかった。なにしろ大勢の子供がいたので、父母も苦勞したことであろう。

昭和四年に、京城府黄金町七丁目の朝鮮家屋の多い一区画に、二階建て一戸を建築した。階下は、応接室やオンドル(朝鮮・中国東北地方の暖房装置)式の居間などがあり、二階は子供部屋となっていた。子供は

すべて一室に押し込みであった。大学予科を終えて本科に進学するころ、やっと自分の個室を作ってもらった。オンドル式の四畳半であった。今ごろの子供たちは、小学生のころから個室の勉強部屋を持ち、その中にこもる風習ができてしまっている。大勢の兄弟・姉妹に囲まれて、年長者からいろいろ指導を受けるのがよいのだがなあと、最近、昔のことを思い出しながら考えるのである。

三 私の青春（戦前の大学生活）

昭和八年四月、京城帝国大学予科に入学した。予科は、当時東大門から郊外電車に乗って約一時間の京元線の清涼里という駅に近い所にあった。林業試験場に隣接し、周囲には水田が広がっていた。授業が始まると、髭面の小男が壇上に立って演説を始めた。あまり論旨が一貫したような話ではないが、いかにも若者が感激するような気の利いた言葉をはいていた。多分、上級生であろうと思っていたが、先生が入室してくると、壇を下りて最前列の席に座った。彼は間違いないと同級生であった。当時、白線入りの帽子をかぶる全国

の高等学校生は、落第することを「ドッペル」（ドイツ語 Doppel 二重）といった。定員四十人の一クラスで、十四、五人の「ドッペった人たち」が出るのである。先生たちは、中学校と違い、学生を一人前の大人として扱うので、あまり文句は言わないが、成績の悪い者には遠慮なく落第を命じたのである。外国語とか哲学には、簡単にヤマをかけられるものではない。

「論語・孟子を読んでみたが、酒を飲むなど

書いてない ヨーイ、ヨーイ、デッカカンショ」と、歌いながらいぶん酒も飲んだ。むちゃくちゃに本を読み、議論もした。それが私の青春というものであった。

私は酒が強く、そして人の世話をするのが性にあっていたので、コンパをやるときにはたいてい幹事役が回ってきた。当時は、共産主義を「赤」といって警察が躍起になって取り締まりをしていた。学生が大勢たむろする所には、大学出身の刑事がよく見回りにやってきたのだが、その刑事に「あんた、また幹事か」と、よく言われたものである。

古きよき時代における、自由奔放な大学予科の学生生活を楽しく過ごし、学年末試験にもどうにかパスし、本科の法科への進学が認められた。

京城帝国大学で法律を専攻したのは、昭和十年四月から十三年三月までである。

この間に、「天皇機関説」問題や「二・二六事件」などが起こった。世間が騒ぎ立てたので、この時代に生きておられた方々は覚えておられることであろう。

この時代を背景にして、法律を学んでいた私たちは、「法の危機」ということを、ひしひしと感じていた。

四 満州開拓へ貢献

昭和十三年三月、ともかくにも大学を無事に卒業した。もう少し法律というものを奥深く勉強したいという希望があり、大学院に進むことにした。ところが、半年もたたぬうちに一大転換をして、満州に行くこととなった。

人間の一生のうち、こうした一つの転機というものは、思いもかけないところからやってくるものだ。これも運命だろう。

指導をしていただいた教授の推薦によるものだったが、就職した会社は満州拓植公社である。奇しくも、父と同じような道を進むこととなった。

学生服を脱ぎ、弟から借りた背広を着て、トランク一つを持って、新京へと勇躍向かったのである。

昭和十三年ごろの満州拓植公社には、まだ独身寮がなく、建築中であった。一時仮宿生活だったが、十二月初の完成と同時に入寮した。寮の名は借拓寮であった。なんでもその名は、聖徳太子の言葉である「借拓（ともにひらく）」から引用したということであった。

寮は、入室すると右側が壁になっていて、本棚が二つ並んでいた。右側の一段と高いところにラジオセットを置いた。本棚は大きかったが、一応本でいっぱいだった。

寒い満州の家々では、独身者でも観葉植物を置いていた。ゴムの木鉢を置き、ビールや牛乳の飲み残しを水で薄めて根元に注いでいたから、葉のつやもよかった。ドイツ語の本と辞典を、常に座卓の上に置いて読んでいた。ほかにはこれといった装飾品もなく、いたっ

て殺風景なものであった。

それからの毎日は、「五族協和」「王道楽土の建設」というスローガンのもと、滿蒙開拓のために東奔西走の活躍をしていた。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発した。私にとっても、この日のことは深く脳裏に焼き付いている。

その日の朝、私はラジオの臨時ニュースで目を覚ました。前夜からつけっぱなしにしてあったラジオからアナウンサーのうわづった声が流れていた。

私の五体に、何か熱いものが走ったような気がした。そのうちに、ラジオから勇ましい「軍艦マーチ」の旋律とともに、開戦のニュースが流れた。床の上に起き直って、そのニュースが伝える輝かしい戦勝を、虚ろな気持ちで聞いていた。ニュースが伝える輝かしさは裏腹に、私は戦慄で身を硬くしていたことを、今でも鮮明に覚えている。

正直言って、戦争が怖かったのであった。そして床の上に座り直して、あたかも逆毛の立ったやせ犬が猛

然と吠えたるように、ラジオから流れている「軍艦マーチ」に励まされて、まだ眠っている寮の各部屋の扉をたたいて回った。「戦争が始まったぞ。戦争が始まったぞ。起きろ、起きろ」と連呼した。

西太平洋での戦争が、石油の入手に直接関係があることは、理屈のうえでは分かっているが、それはやはり遠くのこと、自分の手の届かない問題であるとの認識しかなかった。それよりも、もっともっと身近な問題として、ソ連という隣人は果たして味方だろうか、それとも敵であろうか、という点で私の頭の中は占められていた。

その心配ごとは、それから四年もたないうちに現実の出来事となってしまったのだ。黒河省奇克から、ソ連軍が怒濤のように遼河へと侵入してきたのである。それは、昭和二十年八月九日のことだった。

五 結婚そして召集

昭和十七年の正月、久しぶりに京城へ帰った。にわかに結婚の話が持ち上がり、悦子と結婚した。

旧制第一高等学校の、ある寮歌の曲をとって作詩さ

れた「植民の歌」というのがあった。「広漠千里満州の、地平の果てに陽はあかく、興安嶺の森暗し、いざ立て健児、いざ行かん」という内容であった。

私と家内は、黒河、そして翌年には、興安嶺のふもとにある開拓第一線の遼河の出張所へ移り所長をしていた。

現地で当面していた問題は、土地問題に端を発した、日・満両農民の争いであった。

苦渋に満ちた日々が続いた。古今および洋の東西を問わず、土地に関する問題は、人の争いの最たる因となることを改めて痛感したものだ。

昭和二十年五月末、とうとう私にも召集令状が届いた。後任者のことを考えて、妻は京城に帰すことに決めて、遼河をたつて哈爾濱^{ハルビン}の部隊に入営した。北満の警備にあたるのであろうと想像していたが、案に相違して、六月の初旬には、はるか朝鮮半島の南にある済州島の部隊に移動することとなった。しかし、後から考えると済州島にきたことは、私にとっては、幸いな結果をもたらしてくれたとも思えるのである。

当時は、まだ戦争に負けるなどは考えてもいなかった。私たち一家は、いずれは朝鮮・満州で一家をなし永住するつもりでいた。そのため京城では、墓さえ造っていたのである。

六 終戦から家族と合流するまで

昭和二十年八月九日、思いもかけずに、日ソ不可侵条約を一方的に破って、ソ連軍が満ソ国境を越えて、一斉に侵入してきた。そのことは、済州島の山の中にいた我々にもすぐに伝わってきた。

我々の部隊、第一〇一師団は哈爾濱で編成されてここに来たのであるから、家族は全員満州にいる訳であり、その安否が兵隊たちの最大の関心事となった。我が部隊に関する限り、この日一日は、統制のとれた状態ではなかった。私たちの一家でも、私が済州島におり、上の弟が北京に、下の弟が蒙古で軍属として勤務していた。父母と幼い兄弟たちは京城に住んでおり、いわば一家離散の状況にあった。家族がこのようなことになろうとは、だれが想像できたであろうか。神のみぞ知るといふことだろう。

八月十五日、日本はついに戦いに敗れた。終戦の詔勅が、かすかな声で聞かれたというが、腹がへって、ただ茫然としていた私たちには、その当座にはあまり実感がわかなかった。

十月の初めごろ、米軍の指示で三十八度線以南の朝鮮に家族のいる者は、引き揚げてよいということになった。その指示で恩恵を被った者は、師団の中で約五十人ぐらいいた。そのおかげで、幸いなことに、戦友たちよりも一足早く復員して、京城に帰ることができたのである。

やっと一家がまとまって生活できるようになったが、北京に行っていた次男、蒙古にいるその下の弟の生死は不明のままだった。家は、朝鮮人が大勢住んでいるところで、毎晩のように、強盗やゆすり、たかりの類が現れて、家族の身の安全が保たれなくなったので、日本人の入居者の多いアパートに移り、雑居生活をする事となった。当時は、自分の財産なんかどうでもいい、ただみんなの身の安全を確保することだけと、老いた父は考えていたようだった。

七 引揚げ前後の労苦

十一月の上旬に、一家は揃って貨車で釜山に向かう事になった。

思えばこの数カ月は、悪夢のような毎日であり、どこかの国の白黒映画を見ているような幻想に陥ることもあった。家族親類をまとめて、軍人家族は早く日本内地に帰してしまえ、というのが当時の米軍当局の方針であったようだ。

昨日までは、牛か馬を運んでいたと思われるような、臭くて真っ暗な貨車に、一家全員は押し込まれた。我が家の総勢は、父と継母、父の姉、弟妹四人それに私と妻の計九人で、各人がそれぞれリュックサックを背負い、両手に荷物を持つての逃避行だった。すし詰めの貨車は、幸いにも有蓋車であったので少しはましであった。雨でも降ろうものならば、それこそ大変な目に遭うところであった。電灯もないので、夜はなにもしできない。どこで、いつ停車するのかもまったく分からず、それこそ、あなたまかせの旅である。食べることもままならなかったが、それよりも困ったことは、

排泄の問題であった。貨車が止まると、急いで貨車から降りて、その辺りの野っ原で用を足すのだが、男性はまだよいとして、女性はみじめなもので、かわいそうであった。嫁入り前の娘が野っ原に立つと、男たちは自然と周囲をまるく囲んで、彼女の姿を隠すようにした。このとき、しみじみと「ああ、戦争に負けたのだ」という実感をもった。しかし今では、男の子でも、野外でこんなことができないような時代になってきた。

貨車が止まるたびに、朝鮮人が乗ってきて、金品を強奪していった。後難を恐れて、なすがままにしていた。やつのことで釜山に着いた。しかし、引揚船の都合で、二日間船待ちをした。待機のために定められた施設は狭くて、全員を収容することができずに、成人男子は外で徹夜をした。

軍隊から持ち帰った飯盒に、少しばかりの米を入れて、下駄やポロ布、板切れなどを道で拾ってきて燃やし、どうにか半煮えのご飯が炊け、家族に食べさせたものであった。

十一月中旬、待望の博多港に着き、上陸してみて驚

いてしまった。見渡す限り、高い建物は一つも見えない。地面を詳細に観察すると、すべては瓦礫の山といっても過言ではないありさまだった。

博多の町は、徹底的に破壊されていた。建物などの物的存在だけではなく、人々の心の中までもが破壊されてしまった。

博多駅から、母の故郷の駅にたどり着いたときのことである。ここまで大事に背負ってきた全財産の入ったリュックサックが、気の緩みも加わってか、急に重さを感じるようになったので、最寄りの国鉄の駅に一時間預けた。翌日の朝、受け取りに行ったが、なんと、中身が抜き取られていたのである。だれがみても、駅員の仕業であることは明らかであった。

敗戦は、人の良心をも麻痺させてしまったのである。苦勞してここまで背負ってきた、引揚者の乏しい荷物までも狙う日本人となり果ててしまったのかと思ひ、文句を言う気持ちもおこらなかつた。

戦場と同じような苦しさのあった日本国内で、頑張り通した人々も大変であったとは思ふが、引揚者は、

衣・食・職・住のすべてのものを失ってしまったが、良心までは失ってはいなかったと思う。

外地からの引揚者は、ほとんど同じような運命であったのだろうが、祖父母の代から故郷を離れた人たちに安住の地はなかった。

後日のことであるが、中央公論の「日本の歴史」シリーズで、「大日本帝国の試練」と題して執筆された隅谷三喜男さんは、日本人の性格のうち、人情のこまやかさについて次のように述べておられる。「日本人は、愛情のこまやかな親切な国民であり……窮鳥ふところに入れば、これを助けるというが……自分の仲間と考えられる人に対しては、このうえなく親切であっても、その親切は、この枠外の見知らぬ他人にまでは及ばない。親兄弟をおいて、他人のために働くというようなことは、禽獣の類のすることであって、他人にまでは及ばないのである」と。私は、この言葉と同様なことを身をもって感じたのである。

帰国してから約一カ月して、福岡市の遠い親戚を頼って舞い戻ってきた。いつまでも叔父の家に居候もでき

なかったからであった。ねずみ講まがいの団体に入ったり、小さな町工場に厄介になったりして、なんとか生き延びてきたが、生まれて初めて人生の裏面を、いやというほど見せつけられたような毎日であった。

その家の廊下だけを借りての生活であったが、冬は廊下のすき間からの風で寒さに凍え、夏は夏で、暑苦しくて戸を開けると、蚊や蛾が遠慮会釈なく入ってきて、散々に痛めつけられた。その家にも引揚げの身内の人が帰ってきたので、借りることができずに、二日市の引揚者寮に移った。もと青年学校の寄宿舎だったそうで、ガランとした板の間の部屋に、人数分の畳を借りて、薄暗い電灯のもとで夕食の雑炊をすすったものだった。

ときどき、虚脱感から、近くの田んぼに天幕を広げて、仰向けに転がって本を読んだり、菜の花のにおいをかぎながら、我が家の行く末を案じたりしていた。

八 生活安定への道のり

昭和二十二年九月、どうにかまともな就職口にかじりついた。産業復興公団という戦後復興対策のために

新設された組織であった。

九州地区一帯に残存する、旧軍の兵器や、集積したままの戦車・航空機などの処分、旧軍需資材の活用、隠匿物資の摘発・処理などが当面の仕事であった。活動範囲は、北は対馬から南は種子島までの広い範囲に及び、そこに所在する旧軍事施設が対象であった。

取り扱う物件は、兵器及びそれらを構成する部品・半製品のすべてであり、旧軍の関係物資であれば、金属のみならず、繊維品・油脂類・酒類から味の素までも含まれていて、公団の職員個人個人が持ち合わせている商品知識だけではとうてい間に合わず、多くの代行商社の専門的知識を借りなければならなかった。

私は、三十数カ所に点在する対馬の砲台を切断して、八幡製鉄所の平炉に送り込む仕事も担当した。

アメリカの軍政部は、私たちの仕事のろいのはGHQの指示に従わないで、サポータージュをしているせいだと思つて、再三にわたつて脅迫めいた督促をしてきた。彼らがGHQに電話をすれば、すぐに相手が出てくる。こっちが公団の本部へ電話をかけても、半日

は要した。うそのようだが、それが当時の実情であった。彼らのファイルを見れば、用紙規格が統制されており、ただページをめくるだけで用事が済むようになっている。日本側は、官庁・商社ともに、縦書きあり横書きありで、用紙はまちまち、書類はただまとめてあるだけで、分類整理はしておらず、一つの事案を探すたびに、大変な苦勞であった。事務処理一つをとつても、いたく劣等感をもつたものであった。

今まで、あまり知らなかったアメリカの合理主義と付き合いながら、なんとか仕事をしてきた。生活にも段々と落ち着きができた。

昭和も二十五、六年ごろになると、一般に日本人の日常生活も、少しずつではあるが向上してきた。旧軍払い下げの軍服を改造して作ったジャンパーなどを着ていた男性も、背広が着られるようになった。女性は、髪形を気にしながら、もんぺからスカートへと変貌していった。まだ食糧は配給制度ではあった。しかし、街の飲食店ではもはや外食券を要求することはなかった。

仙花紙で作った怪しげな雑誌も、週刊誌に変わっていった。バクダンといわれた大衆酒も、いつしかトリス・ウイスキーと、しゃれた名前になったし、都会人は、ラバーソールの靴を競って履きだした。

ジュラルミンで製造した鍋・釜はすっかり姿を消した。焼け跡のバラック建ての家も、文化住宅という名の住宅に変わっていった。世の中から段々と戦争の傷跡が消えていき、「もはや、戦後ではない」という言葉が普通になってきた。

しかし、あの外地からの引揚げの苛烈な試練、苦難の引揚げ生活、無からの立ち直りの苦労は、忘れようとしても忘れられるものではない。世の中が、平和になればなるだけ、物が豊かになればなるだけ、それに反比例して、苦しかったこと、悲しかったことが思い出されてならない。

満州開拓の思い出

愛知県 古田 キミエ

私は戦争の激化した昭和十五年に、愛知県北設楽郡設楽町田口から「大陸の花嫁」として、村人に見送りを受け満州への一步を踏み出しました。まるで出征兵士のように、私が二十一才の秋でした。途中主人の家に寄り、親族をまじえて結婚式のかたちだけを取りました。主人の家で一泊した後、豊橋から汽車に乗り下関に着いたのは三日後でした。

その日のうちに釜山行きの船に乗りました。出港の汽笛と共に船が港を離れるときは、陸地が見えなくなるまで甲板に立ち、親とも別れ、これから起きることを知る由もなく、ただ涙があふれて止まりませんでした。船中に一泊して釜山に着きました。遠い外国にきたような心細さがわきました。

釜山から哈爾濱・齊齊哈爾を経由し、三日目に目的